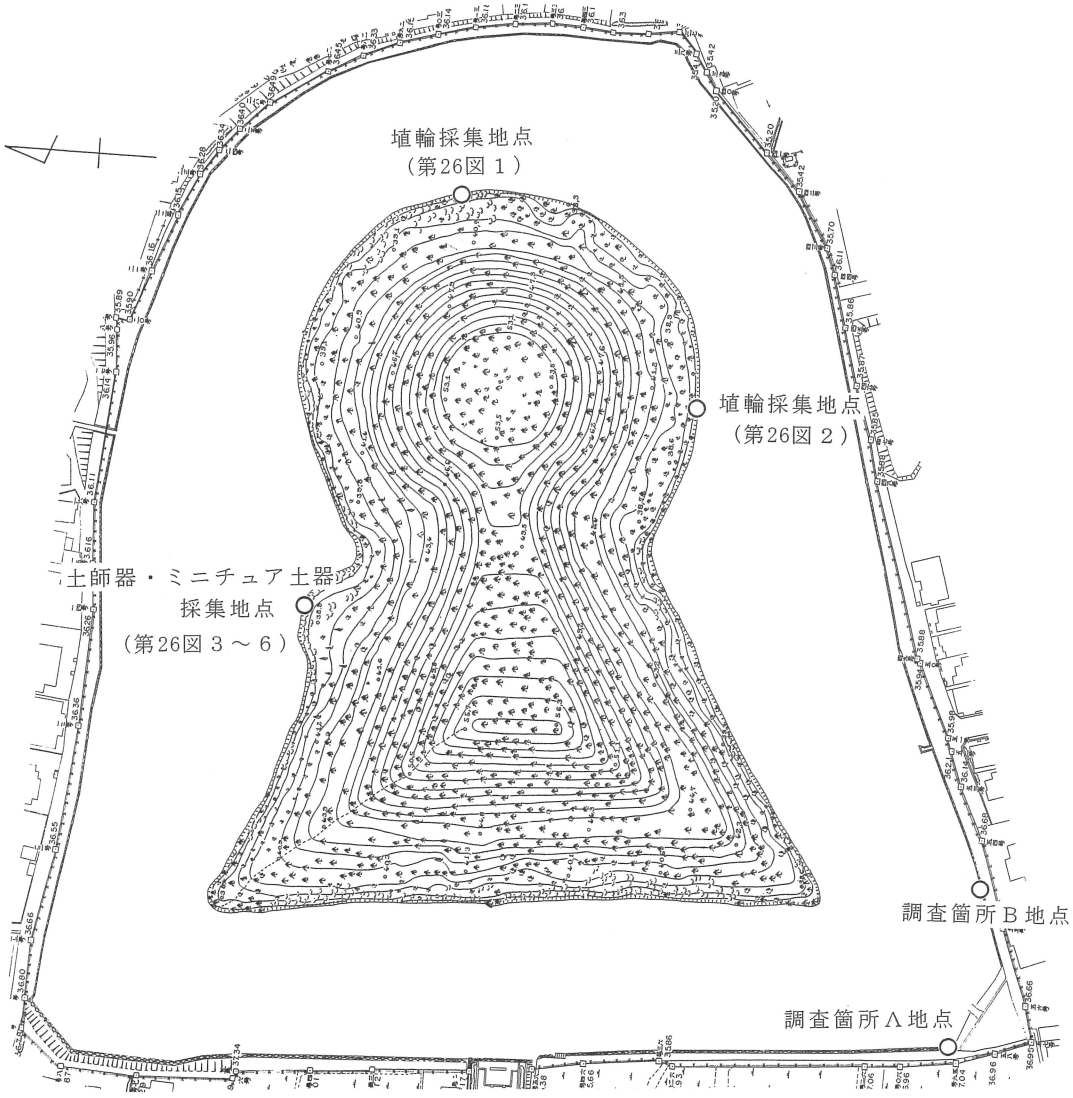
白鳥陵墳塋護岸その他整備工事区域の立会調査

白鳥陵は大阪府羽曳野市軽里３丁目に所在する、古市古墳群の一画をなす前方後円墳である。白鳥陵の墳丘裾が、経年による波浪によって浸食と崩壊が進んだため保護工事が計画され、そのための事前調査を平成13年度に実施し、その成果は本誌第54号に報告したところである。

平成14年度には前述の護岸工事の実施と併せて、前方部外堤内法裾の石積改修工事が実施されたので、基礎部分等の掘削にあたって平成15年１月18日から３月20日までの工事期間中、古市陵墓監区事務所職員による立会調査を実施し、そのうち２月３日から７日までの５日間は本部職員による立会調査を実施した。以下、その立会結果について報告する。なお、護岸工事に当たっては、一切掘削を伴わない工法を採用したので立会調査は実施しなかったが、墳丘裾部で採集した遺物を後掲する。

調査箇所は前方部外堤の正面南半部分(工事延長103.4m)と前方部南側側面(同長62.3m)であり、そのうち正面南半部分の石積は、平成11年７月に一部自然崩壊しており、今回その復旧を目

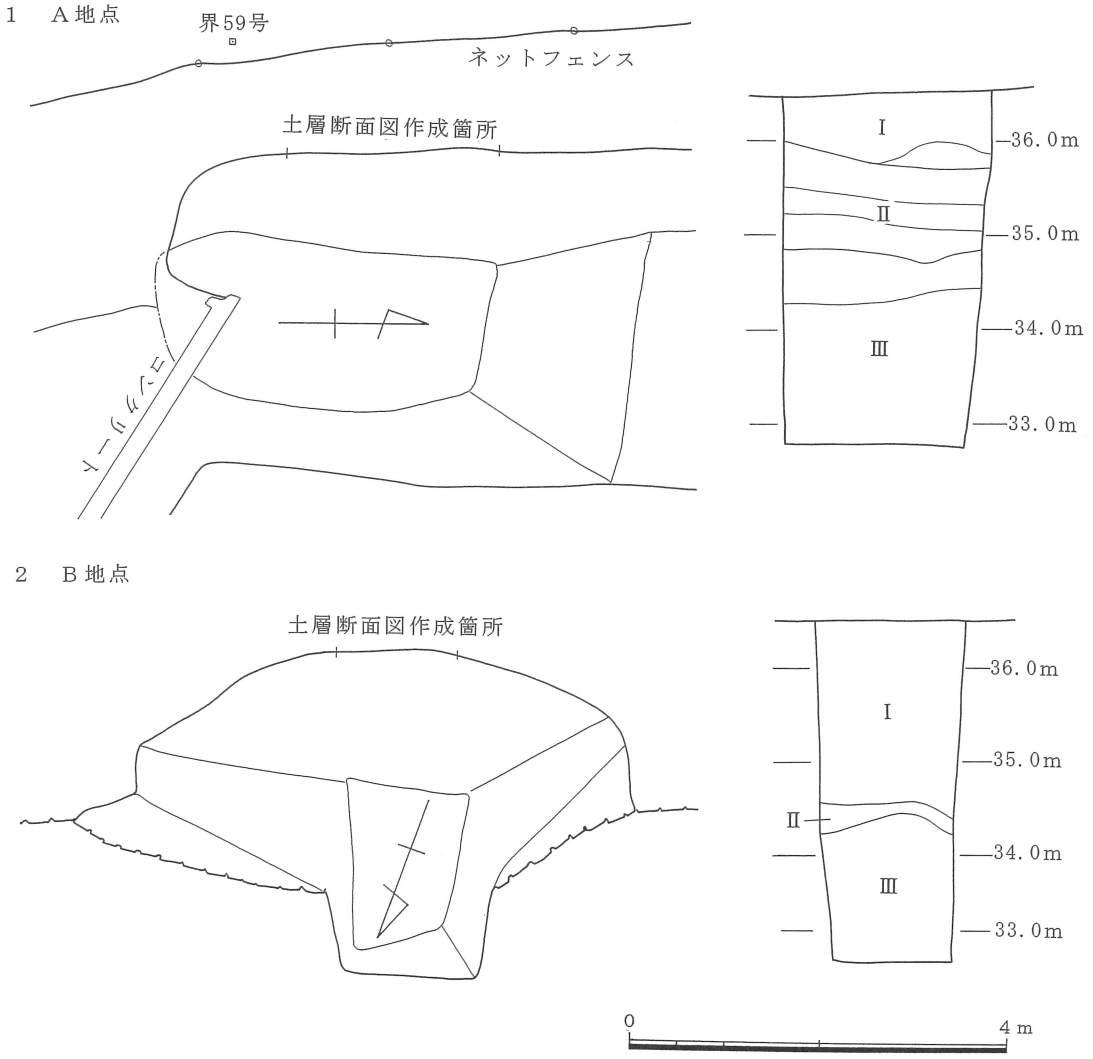


第24図　白鳥陵　調査箇所位置図および遺物採集地点(1/2000)

的としたものである。前方部南側側面についても、石積の一部に孕んでいる箇所が確認され、民家に近いことから併せて改修工事を実施したものである。調査は正面南半施工部分(以下、A地点)、前方部南側側面(以下、B地点)にそれぞれ幅2mほどを掘削し、土層堆積状況を確認した(第24図)。

A地点の平面図・土層断面図は第25図1に示したとおりであるが、掘削箇所の土層は大きく3層に分けられる。現地表面下0.5～0.8mほどは黒色を呈する表土(Ⅰ層)であり、空缶・ビニール紐などを含む土層である。その下に、茶褐色から暗灰褐色を呈する砂質土が検出された(Ⅱ層)。締まりのない土層であり、盛土と判断した。遺物は新しいものを含めまったく出土せず、この盛土が施された時期については不明と言わざるを得ないが、土層の状況から判断して本来の外堤を構築する盛土ではないと判断した。その下の標高34.8m付近において、直径3～5㎝の小礫を含む黄褐色の土層が検出された(Ⅲ層)。途中小礫の有無によって分層することができるものの、非常に堅く締まった土層であり、昨年度の事前調査の結果からも、本土層が地山であると判断した。

B地点の層序(第25図2)も基本的にはA地点と同様であるが、表土とした近年のゴミを含む土



第25図　白鳥陵　調査箇所平面図および断面図(1/80)

層がより厚く堆積している状況が観察された。その下のII層はやはり盛土ではあるが、既設の石積を施工した際に動かしたと思われるような土層であり、まったく締まりのない土であった。第III層とした地山は、A地点と同様である。このB地点からもまったく遺物は出土せず、本来の外堤を構築すると考えられるような土層は検出されなかった。

以上のようにA・B両地点とも、遺構、遺物はまったく検出されず、本来の外堤についての情報はまったく得られていない。その他の掘削箇所からも遺構、遺物は一切出土せず、工事は予定通り施工した。

また、この立会調査を実施した際に、墳丘表面で落下する危険性のある埴輪片などの遺物を採集したので、報告しておく。

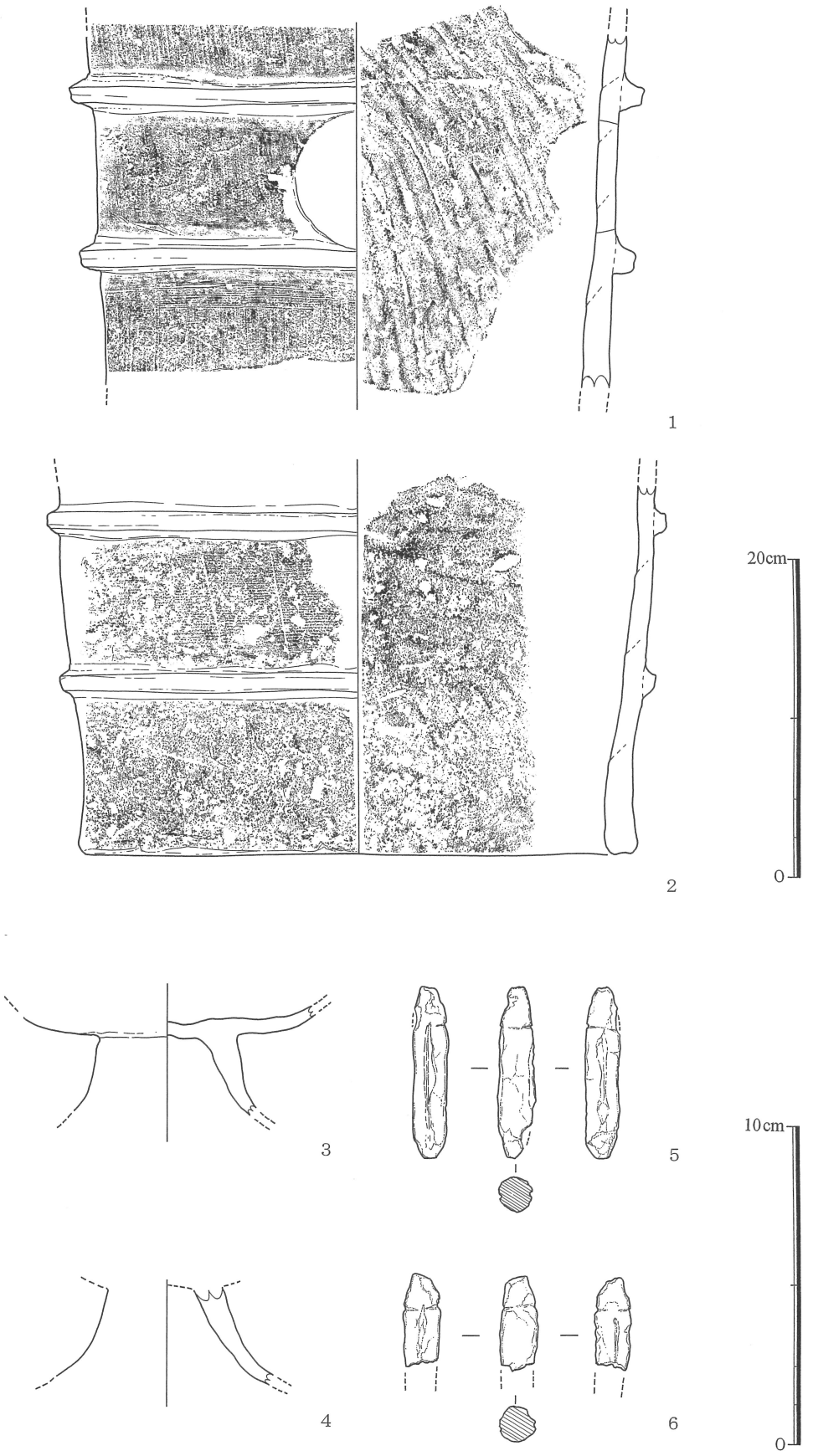
第26図１に示した埴輪は、後円部東側において、同じく２に示した埴輪は、後円部南側で採集したものである(第24図)。これらの埴輪は、昨年度の第26トレンチと同様の状況にあり、本来第１段テラスに並べられていた埴輪列の一部が、墳丘の崩落とともに落下しかかった状態になったと考えられる。

１（図版10－１）は埴輪胴部の破片であり、円形のスカシ孔が認められる。胴部の直径は、32.0cmほどに復元できる。色調は暗灰褐色を示し、硬質感のある焼成となっている。外面の調整は縦方向の板ナデ調整と、横方向の刷毛による調整が施されており、内面は明瞭なユビナデ調整が観察できる。

２（図版10－２）は円筒埴輪の基底部と考えられ、底部から第２段突帯まで現存高23.5cmほどを測る。底部径は直径35.6cmほどに復元できる。色調は赤褐色を呈し、焼成は１に示したものよりは軟質である。外面の調整は第１段は板ナデ調整、もしくはユビナデ調整と思われ、少なくとも刷毛による調整は認められない。第２段には横方向の刷毛による調整が観察でき、途中に停止痕が残る。底部から第１段突帯までは11.0cmを測り、第１段と第２段突帯の間隔はおよそ10.5cmを測る。内面の調整は摩耗のためはっきりしないが、少なくと刷毛による調整は認められず、ユビナデ調整が施されているように見える。

また、北側造出付近において、昨年度と同様ミニチュア土器、土製供物と考えられる遺物を採取した。第26図３・４は高坏であり、昨年度報告したもの(本誌第55号第24図52・53)と基本的には同様の形状を示す。３は脚部から坏部にかけてが残存しており、現存高約3.8cmを測る。４は脚部の破片であり、現存高3.3cmを測る。両者とも製作方法は類似し、手づくね風のつくりであるが、一部には回転力を利用した調整痕も残す。

５・６（図版10－３）に示したものは、土製供物であると考えている遺物である。５は全長約5.4cm、直径約1.1cmを測る中実の棒状を示す個体である。端部がわずかに欠損しているが、ほぼ完形であると考えられる。一端から約1.3cmほどのところは摩耗のため明瞭ではないが、１条の沈線がめぐらされている。この沈線に直行するようにやや太い沈線が両端を結ぶように施されており、同様の沈線が反対面にも施されている。６も同様の土製品であるが、本個体は途中で折損しており現存長は3.0cmである。その他形状、文様は５と同様である。この土製品が何を表現したものかを確定することは難しいが、他の古墳からの出土品を参考にしてあえて示すとすれば



第26図　白鳥陵　出土品実測図（1・2 1/4　3～6 1/2）

「アケビ」が候補にあげられる。

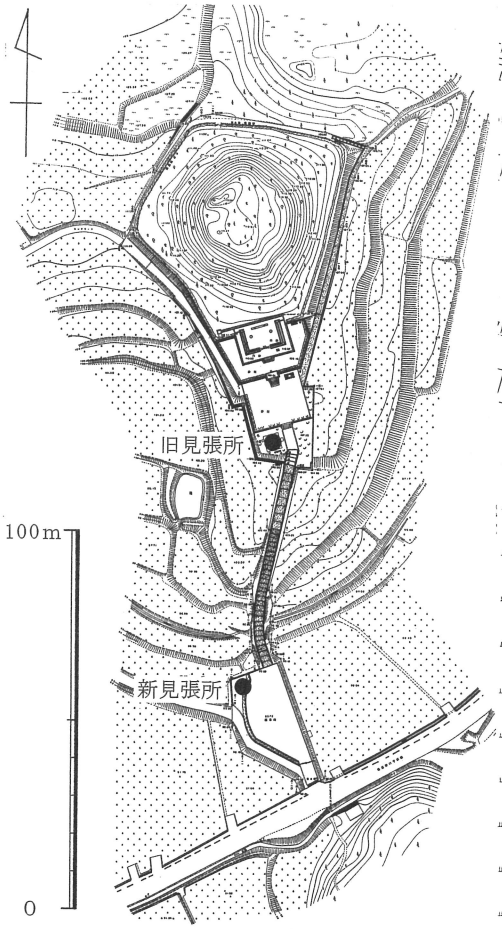
以上報告した遺物以外に施工期間中採集された遺物はなく、墳丘裾護岸工事についても予定通り施工した。

（徳田誠志）

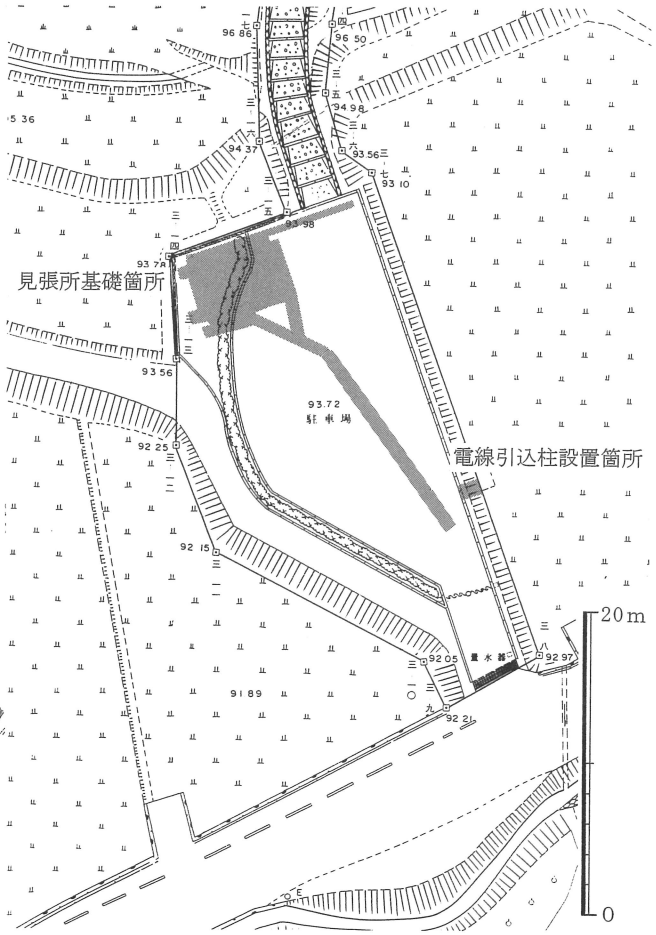
天武持統天皇　檜隈大内陵見張所改築工事箇所の立会調査

天武天皇と持統天皇の合葬陵である檜隈大内陵は奈良県高市郡明日香村大字野口に所在する。東から西へと延びる丘陵から南東方向へ突き出した支丘の頂部に立地しており[1]、墳塋は八角形とされる[2]。西方へ続く主丘の南斜面には、奇妙な石造物として名高い「鬼の俎」や「鬼の雪隠」、欽明天皇檜隈坂合陵、猿石で知られる吉備姫王檜隈墓などが所在し、本陵を含め明日香村散策のメインルートとなっている。

今回の調査は、一般拝所前に所在した見張所が経年のため老朽化し、改築されることになったため行ったものである。見張所の位置は今回の改築を機に丘陵下にある駐車場敷地の一角に変更された（第27・28図）。この駐車場敷地は、本陵が所在する北側の丘陵裾から県道の走る南側丘陵裾を結んで谷底を横断しており、東側ではおよそ１m、西南側ではおよそ２m、周囲の水田面より高い。これは、この敷地が昭和11年から12年にかけて全国の陵墓で展開された「紀元2600年



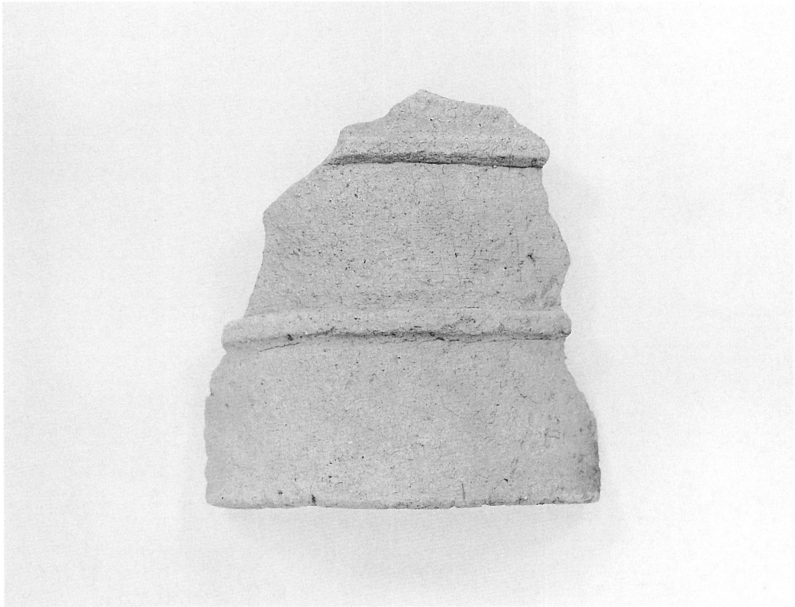
第27図　檜隈大内陵　地形図（1/2000）



第28図　檜隈大内陵　調査箇所位置図（1/500）

図版10

1　白鳥陵出土品
円筒埴輪 1



2　白鳥陵出土品
円筒埴輪 2

3　白鳥陵出土品
供物形土製品